

第二部 法隆寺収納庫建設に伴う発掘調査

I 序 章

法隆寺には、資料価値のきわめて高い各種の文化財が保存されている。それらの文化財は宝蔵殿や収蔵庫、あるいは古い土蔵などに収められている。また、解体修理に伴って保存された建築部材は収蔵庫及び古材庫に収められている。

近年法隆寺内の什宝類の調査を徹底的に行う「法隆寺昭和資財帳」編纂事業が進められており、この調査で新たに発見された資料も次第に増えている。また、当寺に伝えられている4万数千基にのぼる百万塔などは、昭和10年代に箱詰めされて倉庫に納められていたのであるが、整理・調査を進めていくにしたがって、収納方法に万全を期さねばならないことが痛感されるようになった。その他、瓦や土器などの考古資料も発掘調査の結果、厩大な量となっている。

このような状況から付宝類の収納施設が必要とされ、その予定地として律学院の北側の地が選ばれたのである。

律学院の北側は史跡法隆寺旧境内に含まれており、事前の発掘調査を必要とするところでもある。また、昭和56年度の防災工事に伴う発掘調査によって飛鳥時代の溝をはじめ、多くの遺構の存在が確認されている。そのため、発掘調査は収蔵庫を建てる範囲だけに限らず、周辺部をも含めた範囲を対象として調査を行なった。

発掘調査は昭和58年10月26日から同年12月20日までで、630㎡の範囲で進められ、古墳時代以降の遺構を検出することができた。調査は法隆寺の依頼によって、奈良国立文化財研究所と奈良県立橿原考古学研究所とが共同で行なった。



第40図 発掘調査風景